

# 『礼記』における女性観

— 儒教的女子教育の起点 —

任 夢 溪

Thought on Women Depicted in the *Book of Rites*  
The Origin of Confucian Girls' Education

REN Mengxi

## Abstract:

When speaking of Confucian thought on women, words like “男尊女卑” (Man is superior to woman) and “三従四徳” (Three Obediences and Four Virtues) might be recalled immediately. They are regarded as the feudal cross that oppressed Chinese women for three thousand years. For example, Chen Dongyuan (1902-1978) once said that it was “男尊女卑” that made women become the slaves and toys of men, and that was the product of Confucianism. However, such opinion was born in the context of social revolution, and using the modern concept to judge the values of old times is prejudiced, in my perspective. Therefore, this paper will discuss Confucian thought on women written in the *Book of Rites* (『礼記』), which is considered to be the beginning of girls' education, to learn the creed of Confucianism on teaching women at that early period.

**Key words:** 『礼記』、儒教の女性観、男女の別、敬妻、夫義婦聴、夫婦の道

## はじめに

儒教の女性観に関しては「男尊女卑」、「三従四徳」などの語がただちに想起されるかもしれない。特に近代以来、西洋的な価値観（平等主義など）が東アジアに伝わってから、儒教に関しては、女性観だけでなく、全般的にマイナスなイメージが強い。そのため、儒教的女性観は東アジアの女性を三千年にわたって圧迫していた「封建的糟粕」と見なされることも多い。たとえば、陳東原氏は女性を男性の奴隷、玩物として見るのは男尊女卑の結果であり、それは儒教の産物だと見ているようである<sup>1)</sup>。このように「男尊女卑」を儒教の女性観として非難することは陳氏特有の観点ではなく、一般的な見解であるといえる。しかし、このような観点は社会変革の時期に提示されたものであり、偏ったところがあると考えられる。よって本稿では、儒教的女性観をより正確に認識するために、それを記述する早期の文献である『礼記』<sup>2)</sup>をとりあげてみたい。

『礼記』における女性観は主に婚姻倫理や夫婦の間の礼儀の中に現われる。これに関して、賀璋瑤氏は『礼記』が婚姻を宇宙秩序と社会秩序と結びつけ、婚姻がこの二つの秩序を反映し、それを維持する不可欠な力量と見ている。また、『礼記』における「夫婦有義」や「夫婦有敬」といった記述が今日から見ても積極的な意義を有していることを指摘している<sup>3)</sup>。

しかし、賀氏の研究は『礼記』の性別意識をめぐって、女性が婚姻の中で果たした役割や重要性を論じているものの、儒教の婚姻観から生み出された儒教の女性観は何か、また、それが後世の女性や女子教育にどのような影響を与えたかについてはまだ検討する余地があるように思われる。そこで、本稿では、『礼記』に描かれた家庭という場所に行なわれる礼とその背後にある婚姻倫理や家族倫理を踏まえながら儒教の女性観を考察し、その形成と発展、特に後世の女子教育に及ぼした影響を明らかにするとともに、儒教が求める女性の位置づけについても考察したい。

『礼記』は儒教の重要な経典の中の一つであり、戴聖（前漢の学者、生没年不詳）により編纂されたとされ、戦国時代から秦・漢時代の礼制や規範、哲学などをさまざまに論じた書物である。『礼記』の「礼」は生活の各方面に関わるが、女性や両性関係についての記述も多い。全書49篇のうち、儒教的女性観を体現する夫婦や婚姻などに関する論述は主に曲礼上・曲礼下・楽

1) 陳東原『中国婦女生活史』（台湾商務印書館、1978年、初版は1937年）19頁に「使女子無職業、無知識、無意志、無人格。作男子的奴隷、作一人專有的玩物、摧殘自己以悦媚男子的、原來是男尊女卑的結果」という。

2) 本稿で引用した『礼記』はすべて『十三経注疏整理本 礼記正義』（彭林、北京大学出版社、2000年）による。

3) 賀璋瑤『『礼記』の性別意識探略』（『上海師範大学学報（哲学社会科学版）』第42巻第1期、上海師範大学学報編輯部、2013年）128-136頁。

記・郊特牲・内則・哀公問・昏義の諸篇に現われている。これらの篇には、夫婦の道、つまり男女がどのように夫婦関係を作っていくべきか、どのように家庭を運営するかが記されている。以下、男女の別、敬妻思想、夫義婦聽に分けて考察する。

## 一、男女の別

和睦した家族関係を作るのは人間の普遍的な望みであろう。春秋戦国時代の人間も同じであり、『春秋左氏伝』昭公二十六年の条に、理想的な家庭関係が「父慈子孝、兄愛弟敬、夫和妻柔、姑慈婦聽」という語で表現されている。ここには家族の各メンバーがそれぞれの役目を果たし、責任を引き受けるべきことが要求されている。夫婦関係についていえば「夫和妻柔」、すなわち夫婦が互いの役割を守りつつ和睦することが強調されるのである。

では、どのようにすれば、このような「夫和妻柔」の夫婦関係が築けるのだろうか。哀公問篇の孔子と魯の哀公との会話を見てみよう。

公曰、「敢問為政如之何」。

孔子對曰、「夫婦別、父子親、君臣嚴。三者正則庶物從之矣」。<sup>4)</sup>

これによると、魯の哀公が孔子に「政治はどのように行なうべきか」と尋ねた。孔子は「夫婦の別を失わないこと、父子の親しみを損なわないこと、君臣の道を厳しく守ること、この三つが正しく行なわれれば、すべてがこれに従ってくる」と答えた。ここに見られるように、「夫婦別」が先にあって、「父子親」や「君臣嚴」が後にくる。夫婦の別（はじめ）をきちんと保持することが万事を正しくとり行なうための第一義的要件となっているのである。つまり、「夫婦の道」にとって最も重要なのは夫婦の別という原則である。その理由について、昏義篇に次のようにある。

敬慎重正而後親之、礼之大体。而所以成男女之別、而立夫婦之義也。男女有別、而後夫婦有義。夫婦有義、而後父子有親。父子有親、而後君臣有正。<sup>5)</sup>

これによれば、敬い慎しむ気持ちを持ちつつ親しむのが礼の根本である。こうしてはじめて男女の別が成り、夫婦の義も立つ。そして、男女の別があつてはじめて夫婦の義があり、夫婦の義があつてはじめて父子の親しみがある。さらに父子の親しみがあつてはじめて君臣の正しい関係が生まれる。ここに示されているように、礼的な社会秩序を立てるためには家庭内の秩

4) 『礼記正義』、1606頁。

5) 同上、1890頁。

序を整えなければならない。そのためにはまず、男女の別を立てなければならないという。

また、この敬い慎む気持ちを婚礼の中に具体的に表現すると、納采、問名、納吉、納征、請期、親迎という六つの段取りを通して婚姻関係を結成することにもなる。後世、この六つの段取りは「六礼」と称されている。たとえば「親迎」について、郊特牲篇は次のように述べている。

男子親迎、男先於女、剛柔之義也。天先乎地、君先乎臣、其義一也。執摯以相見、敬章別也。男女有別、然後父子親、父子親然後義生、義生然後礼作、礼作然後萬物安。無別無義、禽獸之道也。<sup>6)</sup>

これによれば、男が女に先立つのは剛柔の原理による。これは天が地に先立ち、君が臣に先立つのと同じ原理にもとづく。また、男が嫁を迎えに行く際に贈り物を持参するのは嫁に対する敬意を表わすとともに、男女の別を明らかにすることだという。こうして、男女（夫婦）の別を明らかにした上で、父子の親和が成り立ち、かくてはじめて義が成り立つ。さらにこれにもとづいて礼が成り立ち、礼が成り立つことによって万物が安定する。逆に、このような「別」も「義」もない生き方は禽獣の道だという。

このように、『礼記』では、夫婦の別、もしくは男女の別を失わないことが極めて重要なこととされている。子供が生まれてまもなく男女の別を教育するとされることからその重要性がわかる。具体的な論述は主に内則篇に示されており、たとえば次のように見える。

子生、男子設弧於門左、女子設帨於門右。三日、始負子、男射女否。<sup>7)</sup>

能言、男唯女兪。男鞶革、女鞶絲。<sup>8)</sup>

三月之末、擇日剪發為髻、男角女羈、否則男左女右。<sup>9)</sup>

誕生したばかりの子にこのような性別意識を設定するのは、子供の親に対して、性別の相違によって育て方も同様ではないことを明示し、そのような性別意識を子供にも学ばせようとするものである。

また、同篇には「七年男女不同席、不共食」<sup>10)</sup>とあるように、子供はもの心がつく年になる

6) 同上、949-950頁。

7) 子が生まれて、男の場合は弓を門の左にあげ、女の場合は領巾を門の右にあげる。三日目に子を負う儀式があり、男の子の場合は負った人に弓を射てもらうが、女の子にはそうしない。

8) ものを言うことができるようになったら、男は唯（い）という返辞、女には兪（ゆ）という返辞を教え、また男はなめし革の袋を佩びさせ、女には絹の袋を佩びさせる。

9) 生まれて三か月の末に、期日を選び子供の髪を頭の頂部だけに残し、男は角に結び、女は羈に結ぶ。あるいは、男は左に結び、女は右に結ぶ。

10) 七歳になったら、男女を一つの筵に坐らせず、一つの器から食べ物を取らせない。

と、両親などの第三者を通さず、直接に子に性別意識を植え付けるようにする。

さらに、男女の別は子供の成長とともに言動の範囲や、さらに嫁ぎ先での生活などへと広がっていく。同篇では続いて次のように述べている。

礼、始於謹夫婦、為宮室、辨外内。男子居外、女子居内、深宮固門、闔寺守之。男不入、女不出。

男不言内、女不言外。非祭非喪、不相授器。其相授、則女受以篚、其無篚則皆坐奠之而後取之。外内不共井、不共湔浴、不通寢席、不通乞假、男女不通衣裳、内言不出、外言不入。

男子入内、不嘯不指、夜行以燭、無燭則止。女子出門、必擁蔽其面、夜行以燭、無燭則止。道路、男子由右、女子由左。

すなわち、礼儀は夫婦の関係を謹んで守ることに始まる。まず家のつくり方からして内外に二分し、男は外に居り、女は内に居る。女の室は入口から遠く、門は人を自由に通さず、番人が守り、男はみだりに内に入らず、女はみだりに内を出ない。

男は内の事に口を出さず、女は外の事を言わない。祭祀や葬礼の際でなければ、男女は器などの受渡しをしない。受渡しをするときは、女は篚（はこ）で受けるのが作法であり、篚のない場合、男女ともに跪き、男は物を下に置き、それから女が取る。また外と内では井戸を別々にし、浴室を共用せず、寝るための筵を共用せず、物を貸し借りせず、衣裳を共用しない。内の事は外に言いふらさず、外の事は内と言わない。

男は内に入ったら嘯（口笛）を吹かず、指で人や物をさし示さず、夜、外出する時には灯火（ともしび）を使い、灯火がなければ外出しない。また女は、家の外に出るときは必ず顔を隠す。そして男と同様、夜、外に出るには灯火を使い、灯火がなければ外出しない。道路では、男子は右を行き、女子は左に行く。

このように、居場所、立ち居振舞、生活用品、物の受け渡し、言葉遣いや役割分担、責任などの違いにより、内外を分け、男女の別をはっきり立てて行動すべきことが求められている。女（妻）に対してひたすら要求するのではなく、夫婦双方は互いに配慮しつつ生活規範を守り、異なる分業を通して理想的な家庭運営を維持するというのである。内則篇に書かれるこのような男女の役割分業や生活規範などは、後世の家訓や女子訓および『小学』の中に採用され、身を修め、家を整える規範となった。

さて、なぜ『礼記』は生活の各方面で男女の別を強調するのであろうか。その理由は坊記篇に記載された孔子の語に窺われる。

子云、「夫礼、坊民所淫、章民之別、使民無嫌、以為民紀者也」。故男女無媒不交、無幣不

相見、恐男女之無別也。<sup>11)</sup>

つまり、孔子によると、礼は人々が犯しやすい過失を防ぎ、身分の区別を明らかにして疑いを解くことで人々の生活を規律するものである。よって男女は媒人がなければ交際せず、幣を納めるまでは会いに行かない。これは男女の別を無くすことを恐れるためだという。孔子がこのような男女の防を強調する背景には、当時社会のモラルが乱れたことが窺われる。孔子や当時の儒者たちの礼樂崩壊に対する憂慮は賀璋瑤氏が論じたように、たとえ煩瑣で緻密な規定が奇怪で情理に合わない所があるとしても、そこには春秋戦国時代に乱れた天下の秩序を是正しよう、恢復しようとする儒家の努力が見られる<sup>12)</sup>。

また、楽記篇に「男女無辨則乱昇」とあるように、「無別」は「乱昇」であり、男女関係が乱れることに陥る。「辨別」があつてこそ、「昇成」となり、天地陰陽がうまく作用しうるのである。

このように、「男女の別」という原則は天と地、陰と陽の運営法則の上に建てられている。天地陰陽のはたらく原理を男女の間に応用し、男女の別をはっきり立てることにより、夫婦関係が確実に築かれるようになるというのである。

## 二、敬妻思想

前節の考察からもわかるように、儒教は陰陽思想を信奉し、どちらか一方に偏ることのない中庸の道を求めた。陽盛陰衰であれ、陰盛陽衰であれ、いずれも儒教が追求するものではなかった。微視的に言えば、夫の妻に対する態度は家庭によって違うので、妻だけが夫に圧迫されるとは必ずしも言えない。中国の歴史を顧みれば、妻の威厳に怯える恐妻家であった男は少なくない。たとえば、「河東獅子吼」という成語は蘇軾<sup>13)</sup> (1036-1101) の友人である陳季常 (生没年不詳) が妻のことを畏れることで有名である。また、明末の有名な将軍戚繼光 (1528-1588) もその一人である<sup>14)</sup>。儒教は当然そのようなことを提唱しないが、妻を圧迫し、虐待することも同様に提唱しない。『礼記』は夫婦の道を長期間維持するために、男女の別を立てるだけでなく、

11) 『礼記正義』、1656頁。

12) 賀璋瑤『『礼記』的性別意識探略』135頁に「『礼記』中上述内容的繁瑣細緻規定雖有一些顯得怪誕与不合人情、但其体现了儒家在春秋戰国的“天下大乱”时期力圖糾偏与恢復、重整秩序的一種努力、尽管這種糾偏与努力有“過猶不及”的意味」という。

13) 蘇軾の「寄吳德仁兼簡陳季常」(『蘇軾詩集』卷二十五)に「龍丘居士亦可憐、談空說有夜不眠。忽聞河東獅子吼、拄杖落手心茫然」とあるように、陳季常は妻を恐れていたようである。陳季常、名は慥、北宋眉州 (現在の四川省青神) の人。黄州 (現在の湖北省黄冈市黄州区) に隱居し、龍丘先生、方山子と呼ばれた。蘇軾とは親友である。

14) 汪道昆 (戚繼光の親友) は「明故特進光祿大夫少保兼太子太保中軍都督府左都督孟諸戚公墓誌銘」(『太函集』卷五十九)に「御人露諸姬多子狀、日操白刃、願得少保而甘心。少保衷甲入寢門、号挑而慙祖欄、乃大慟。一品亦棄刃抱頭痛哭、乃携安國子之」とある。

夫婦双方は互いに尊敬すべきだと主張している。

たとえば、哀公問篇では、孔子が魯の哀公に、夏殷周三代の賢王を例にして妻を尊敬することの大切さを次のように強調している。

昔三代明王之政、必敬其妻子也、有道。妻也者、親之主也、敢不敬与。<sup>15)</sup>

このように、賢王たちは必ずその妻や子を尊重するように教えを設けていた。妻は夫の親たちの祭祀には大事な役をつとめるのであるから、これを敬わなければならないとされている。夫として、妻を自分の意志に従わせるのみならず、妻を尊重するという点は『礼記』の女性観において無視できないものといえよう。

また、哀公問篇には次のような対話がある。

公曰、「寡人雖無似也、愿聞所以行三言之道、可得聞乎」。孔子對曰、「古之為政、愛人為大。所以治愛人、礼為大。所以治礼、敬為大。敬之至矣、大昏為大。大昏至矣。大昏既至、冕而親迎、親之也。親之也者、親之也。是故、君子与敬為親。舍敬、是遺親也。弗愛不親、弗敬不正。愛与敬、其政之本与」。<sup>16)</sup>

ここで、孔子は古えの為政者の例を挙げ、哀公にどのように国家を治めるかを説いている。すなわち、人民を愛することが大切であり、人民を愛するためには礼を用いることが大切だとする。そして礼を行なうには敬の心が大切であり、敬の心の極まりとしては婚礼が最も重要であるという。婚礼には男（婿）の女（嫁）に対する敬意が溢れているというのであろう。また、男が礼冠礼服してみずから女を迎えに行くのは、妻に対する夫の親愛の情を示すものである。そして、こうして愛と敬を保つことが政治の根本になるという。要するに、夫婦の道を根本として社会秩序を立てるといっているのである。

さらに、昏義篇において、最も妻に対する敬意を示す婚礼について、次のように記述している。

父親醮子、而命之迎、男先於女也。子承命以迎、主人筵几於廟、而拜迎于門外。婿執雁入、揖讓升堂、再拜奠雁、蓋親受之於父母也。降、出御婦車、而婿授綏、御輪三周。先俟於門外、婦至、婿揖婦以入、共牢而食、合卺而醕、所以合体同尊卑以親之也。<sup>17)</sup>

これによれば、男が女に先立つことを表現するために、男の家では、父が子に酒を飲みつく

15) 『礼記正義』、1607頁。

16) 『礼記正義』、1606頁。

17) 同上、1888-1889頁。

させ、嫁を迎えに行かせる。そして、男は婿として、雁を持って女家に入り、廟堂に登り、嫁の両親から直接に婦を受けとめる。次に、二人が家を出ると、男は自分で（女家が準備した）車を運転し、綬を嫁に渡し、嫁を載せて車輪を三周に回転する。その後、男は（自分の車で先に帰り、嫁が到着するまで）、自家の門外で待つ。嫁が着くと、婿は嫁に礼を行い、伴って家に入り、同じ牲畜の肉を共に食べ、盃で酒を飲む。これは二人が一体となり、夫婦としての地位を共有し、互いに親しむという意味を示しているという。また、郊特牲篇の「婿親御授綬、親之也」によると、これは婿が嫁に対する親愛な感情を示している。

以上により、宗法社会における婦人の従属的性格が見えるが、夫は妻に対して敬意を持つべきことも強調されている。また、孔子は妻を尊敬することをきわめて重要視し、敬妻しなければ、結局、根本を損なうとさえいう<sup>18)</sup>。このように、妻を尊敬することは一族に限らず、天下、国家のあり方も深く関わる重要なものとされるのである。

### 三、夫義婦聴

楽記篇に「楽統同、礼辨異、礼楽之説、管乎人情矣」とあるように、人情には礼楽と同じように共通（同）と区別（異）の二面がある。よって、夫婦間においては、夫婦の別が重んじられるだけでなく、同の面も重視されている。「楽者、天地之和也」と同様に、夫婦の和も求められるのである。礼運篇において、和睦な関係を作り出すために、夫婦は以下のように要求されている。

何謂人義。父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聴、長恵、幼順、君仁、臣忠十者、謂之人義。<sup>19)</sup>

ここでは「人義」について説明しているが、「夫義」と「婦聴」はその中の二つとして挙げられている。十義の中では人倫関係に関する項目が八つを占めている。また、郊特牲篇は「夫義」と「婦聴」に関して、以下のように解説している。

出乎大門而先、男帥女、女従男、夫婦之義由此始也。婦人、従人者也。幼従父兄、嫁従夫、夫死従子。夫也者、夫也。夫也者、以知帥人者也。<sup>20)</sup>

18) 『礼記』哀公問篇に「孔子遂言曰、「昔三代明王之政、必敬其妻子也、有道。妻也者、親之主也、敢不敬與。子也者、親之後也、敢不敬與。君子無不敬也、敬身為大。身也者、親之枝也、敢不敬與。不能敬其身、是傷其親、傷其親、是傷其本、傷其本、枝從而亡。三者、百姓之象也。身以及身、子以及子、妃以及妃、君行此三者、則愾乎天下矣、大王之道也。如此、国家順矣」」とある。

19) 『礼記正義』、802頁。

20) 同上、950頁。



すなわち、男は嫁を迎える際、女の家の中門を出てから先立つ。男が女を導き、女が男に従うという夫婦の義はここから始まる。そして、「婦人とは人に従う者なり」とし、幼い時は父兄に従い、嫁しては夫に従い、夫死しては子に従う、といういわゆる「三従の道」を説く。一方、夫（おっと）とは、夫（ふ）であり、知によって人を率いるものだとする。

要するに、「夫義」は男が家の大本として、家を導く者として主要な責任を負うことであり、「婦聴」は女がそれに従うことをいう。これは一見、女性蔑視の思想のように見えるが、必ずしもそうではなく、むしろ剛と柔、陽と陰が互いに依存して存在するように、当時の男女の役割の違いに着目した表現と見ることができよう。夫（男）は家を統率する者として大きな責任を担い、妻（女）はそれに協力してつき従っていく、ということであろう。しかし、男自身の品格と能力が家を統率できないとき、妻は必ずしも夫に従順するわけではない。たとえば、『孟子』離婁篇下には妻と妾が夫の無能と偽りのため自分たちの将来を憂える話がある<sup>21)</sup>。班昭<sup>22)</sup>の『女誡』<sup>23)</sup>にも「夫不賢、則無以御婦」<sup>24)</sup>とあるように、夫は賢明でなければ、妻を制御することもできない。

しかし、後世では「三従の道」が注目され、妻は常に柔順でなければならないと見なされるようになった。最初に「三従」について説いたのは『儀礼』喪服・子夏伝「婦人有三従之義、無専用之道。故未婚従父、既嫁従夫、夫死従子」である。この思想はいわゆる「四徳」とともに、後世の女子教育思想の主旨となった。「四徳」に関しては、昏義篇に以下のように述べている。

婦順者、順於舅姑、和於室人、而後當於夫、以成絲麻布帛之事、以審守委積蓋藏。是故婦順備而後内和理、内和理而後家可長久也、故聖王重之。

是以古者婦人先嫁三月、祖廟未毀、教于公宮、祖廟既毀、教于宗室、教以婦德、婦言、婦容、婦功。教成祭之、牲用魚、芼之以蘋藻、所以成婦順也。<sup>25)</sup>

ここにあるように、「四徳」は婦徳、婦言、婦容、婦功である。そして、「四徳」は「婦順」

21) 『孟子』離婁篇下に「齊人有一妻一妾而处室者、其良人出、則必饜酒肉而後反。其妻問所與飲食者、則尽富貴也。其妻告其妾曰、良人出、則必饜酒肉而後反、問其與飲食者、尽富貴也、而未嘗有顯者來、吾將瞷良人之所之也。蚤起、施從良人之所之、遍國中無與立談者。卒之東郭墦間、之祭者、乞其餘、不足、又顧而之他、此其為饜足之道也。其妻歸、告其妾曰、良人者、所仰望而終身也、今若此。與其妾誦其良人、而相泣於中庭。而良人未之知也、施從外來、驕其妻妾。由君子觀之、則人之所以求富貴利達者、其妻妾不羞也、而不相泣者、幾希矣」とある。

22) 班昭（約45年-約120年）、字は恵班、右扶風兄安陵（現在の陝西省）の人。史学家・班彪の娘、班固と班超の妹である。平陽の曹寿に嫁いだため、後世に「曹大家」と呼ばれている。

23) 『女誡』は後世、女子教育の重要典籍となったものであり、卑弱第一、夫婦第二、敬慎第三、婦行第四、専心第五、曲従第六、和叔妹第七に分かれている。

24) 山崎純一『女四書・新婦譜三部書全釈』（明治書院、2002年）、87頁。

25) 『礼記正義』、1892-1893頁。

の具体的な表現として挙げられ、婦人が日常生活での身振りや躰に規範を加え、女性品格の善悪を評価する根拠となっている。

また婦人が舅姑や夫に従順することが「婦順」とされ、結婚する前からこれを女子に教え、嫁ぎ先では妻として本分内のことをきちんと勤め、家庭の長久を保つことが求められている。このように、「婦順備而後内和理、内和理而後家可長久」と考える儒教は、当然婦人の道德修養を重視する。郊特牲篇には、次のように述べている。

幣必誠、辞無不腆。告之以直信。信、事人也。信、婦德也。

壹与之齐、終身不改。故夫死不嫁。<sup>26)</sup>

これによれば、婚礼の際、男家が女家に贈る幣（手みやげ）は誠意をこめなければならず、言葉は美しくなければならない。そしてこれをもって婦人に正直と信義を教える。信は、立身の根本であり、婦徳である<sup>27)</sup>。婦人が一旦結婚すれば、一生変えることはなく、夫が死んでも再婚はしないという。

ここでは、婦徳（信）や夫死不嫁（壹与之齐、終身不改）について説いている。「壹与之齐、終身不改」のような忠実かつ貞潔な思想のうちに夫婦倫理の中の最も重要なポイントの一つとなるが、先秦時代の儒者たちにとって、これはただ女性への期待にすぎず、必ずしもそれを守らなければならないというわけではない。よって、『礼記』雑記篇に夫が妻を離縁する時に守る礼を次のように記している。

諸侯出夫人、夫人比至於其国、以夫人之礼行、至、以夫人入。使者將命曰、寡君不敏、不能從而事社稷宗廟、使使臣某、敢告於執事。主人対曰、寡君固前辞不教矣、寡君敢不敬須以俟命。有司官陳器皿、主人有司亦官受之。妻出、夫使人致之曰、某不敏、不能從而共粢盛、使某也敢告於侍者。主人対曰、某之子不肖、不敢辟誅、敢不敬須以俟命。使者退、主人拜送之。如舅在、則称舅。舅没、則称兄。無兄、則称夫。主人之辞曰、某之子不肖。如姑姊妹、亦皆称之。<sup>28)</sup>

ここに書かれているように、諸侯であれ庶民であれ、離婚する際には礼のとおりに行動すべきであり、夫婦双方は離婚をもたらしたのは自らの責任であるとして互いに謝らなければならない。また、離縁される妻に対して、夫が妻の過失を非難せず、自分の責任として身に引き受

26) 同上、949頁。

27) 孔穎達疏「下唯云「信、事人」、「信、婦徳」、不云「正」者、正是信之小別、信則兼之」（『礼記正義』、951頁）とあるように、「告之以直信」の後、「直」を論じないのは、「直」は「信」の中に含まれている。

28) 『礼記正義』、1433-1434頁。

けることが注目される。それに、先秦時代においても離縁がなかったわけではない。たとえば、孔子の孫である子思と学生である曾子がかつて妻と離縁したことがあるとされる。特に、曾子は妻と離縁するとき、妻がその後再婚できるように、本当の原因を隠し、「ご飯を作るのが下手だ」という関係のない理由を作った<sup>29)</sup>。

要するに、夫婦関係は「別」と「敬」だけでは円滑に進行しないため、「和」を以て、夫婦が互いに協力し、和睦かつ親愛の関係を構築することが求められている。「夫義、婦聴」は儒教が理想とする夫婦関係であり、夫（男）は一家の主として自ら責任を担い、妻（女）はそれに協力して夫をついていくわけである。しかも、従属的な位置に置かれた妻に対して「正」と「信」を要求する結果、「壹与之齊、終身不改」は後世、女性の貞節観となったが、ここでは、儒者の一生にわたる堅固な婚姻関係への期待が込められているとも読める。また、この期待がはずれた場合（離婚）にしても、夫婦双方がきちんと礼を守って離縁することや互いに相手に謝罪することなどが要求されている。さらに、長久堅固な婚姻関係を築くために、婚礼を最も重要なこととして注目することからもわかるように、女性に対しては真剣かつ厳正な態度を採用している。しかし、このような態度は婚姻関係の開始や過程にとどまらず、終了（離婚）する際にも続き、女性に再婚することができるように相手の弱点と過失を隠すなど、夫として持つべき責任感を示している。ここに見られるように、『礼記』に描かれた女性観は、社会秩序、家庭秩序を整えるために女性には「婦聴」（婦順）を要求するが、その前に「夫義」、すなわち男性が家庭に対する責任感を必要としている点が特徴的である。

#### 四、夫婦の道

これまで『礼記』における夫婦の道を確立するための三つの重要な原則、男女の別、敬妻思想、夫義婦聴について述べた。夫婦の道において、男女の別がその第一位に置かれ、夫婦がそれぞれに果たすべき役割を求めるほかに、主導者としての夫は妻に敬意をはらうことも強調されている。しかも、妻の職分を求める前に、夫の責任が先に問われる。長久かつ堅固な夫婦関係を築くために、「和」も必要な要素とされている。

『礼記』のような夫婦倫理に関する思想は後世の儒教著述や女訓書の中に反映され、夫婦や夫婦の道がさらに展開、検討されるようになった。

まず、夫婦について、後漢の班固は『白虎通徳論』巻七・三綱六紀篇に以下のように定義している。

夫婦者、何謂也。夫者、扶也、以道扶接也。婦者、服也、以礼屈服。

29) 班固『白虎通徳論』巻四・諫諍篇に「『伝』曰、曾去妻、藜蒸不熟。問曰、婦有七出、不蒸亦預乎。曰、吾聞之也、絶交令可友、棄妻令可嫁也。藜蒸不熟而已。何問其故。此為隠之也」とある。

すなわち、夫たる者は、支えるものであり、道を以て扶持するものである。婦たる者は、つき従うものであり、礼を以て服従するものであるという。

そして、妹の班昭も『女誡』敬慎第三篇に「夫為夫婦者、義以和親、恩以好合」<sup>30)</sup>と述べ、夫婦とは義理によって親しみあい、恩愛によってよい和合するものだとする。

このような定義の上に、班昭は、夫婦の道を陰陽、神明、天地、人倫と関連づける。同篇に「夫婦之道、參配陰陽、通達神明。信天地之弘義、人倫之大節也」とあるように、夫婦の道を天地陰陽など宇宙の働く原理となぞらえるのである。

『礼記』にもどれば、郊特牲篇に「天地合而後萬物興焉。夫昏礼、萬世之始也」とあり、天地の力を合わせて万物が生まれるのと同じように、男女が結婚し子孫を生むのが万世の始まりだということ。中庸篇にも「君子之道、造端乎夫婦、及其至也、察乎天地」とあり、君子の道は夫婦に始まり、その至る所に及べば、天地を察することもできるという。ここからもわかるように、夫婦の道、あるいは夫婦の間の礼的秩序こそは、最も重要なこととされている。どのように夫婦関係を処理するのかは男性みずからの修身だけでなく、天地宇宙の原理とも大きな係わりがあるというのである。こうして、男女間の礼的秩序は「合二姓之好、上以事宗廟、而下以繼後世」<sup>31)</sup>という目的を達成することができる。つまり、二姓の間に親しい関係を作ることによって、上は宗廟の祭りを絶やさず、下は家筋を後世に伝え、祖先祭祀儀礼と家族繁栄を保証するものと見なされている。さらに、経解篇に「昏姻之礼廢、則夫婦之道苦」<sup>32)</sup>の語にも示されるように、婚姻、婚礼が夫婦の道において果たす役割はきわめて重要なものとされていた。

要するに、夫婦の道は天地陰陽という宇宙の原理を示すにとどまらず、家族ひいては国家の運営にもきわめて大きな影響を与える。これも歴代の君主が夫婦人倫を重視してきた要因の一つと考えられる。

## おわりに

以上のことから、『礼記』は男女関係、婚姻関係を重視していることがわかる。婚姻は礼の起点であり、これを根本とすることで家族成員の間関係が調和される。理想的な家庭モデルとしては、中庸篇に『詩経』の「妻子好合、如鼓瑟琴、兄弟既翕、和樂且耽。宜爾室家、樂爾妻帑」を引用し、和睦な家族関係を描いている。それは『春秋左氏伝』が述べていた「父慈子孝、兄愛弟敬、夫和妻柔、姑慈婦聽」でもある。

夫婦関係が不安定であれば、さまざまな問題が起り、家庭の和睦にも影響を与える。男女間の穏やかで堅固な婚姻関係は家庭の和睦と政権の安定にも多大な影響を与える。したがって、

30) 注22前掲、『女四書・新婦譜三部書全釈』、91頁。

31) 『礼記正義』、1888頁。

32) 同上、1602頁。

『礼記』は夫婦関係を他の人間関係よりもいっそう重視している。同時に、男性が家庭においてより多くの責任を果たすように期待をかけている。

このように、男性を家庭の主導的な地位に置く儒教は男性に対して強い責任感を要求している。どのように家を治めるか、どのように夫婦関係を築くかは男性にとって喫緊の課題であった。秩序ある、和睦した家庭を作るために、『礼記』はまず男女の別を区分することを主張する。「別」があつてこそ礼的秩序があり、礼的秩序があつてこそ、夫婦は互いに尊敬しうる。しかし、「敬」のみで夫婦関係が成り立つわけではない。『礼記』が「親」や「和」を大切な要素として強調しているのはそのためである。夫は妻である女性に対して親愛の情を持たなければならない。そして、その親愛の情を表現するために、結婚の際、男はみずから嫁を迎えに行くことされる。ここから、女性を尊重するという思想が儒教にあることが知られるであろう。

要するに、儒教の女性観は女性に対して服従を強圧的に要求するものではなく、夫には妻に対する配慮が求められる。また、妻が柔順であるならば、夫は剛強でなければならないが、これは夫に対して、家庭内での強い責任を負わせるものでもある。確かに「三従の道」に見られるように、女性は男性に対して従属的ではあるが、しかし、陰と陽がどちらも不可欠であるように、夫と妻はそれぞれの立場にもとづく役割を果たしつつ、互いに愛情と敬意をもって交わり、家庭を和睦させ、維持していくことが求められるのである。ここには単なる「男尊女卑」という言葉では覆い尽くせない男女関係があるといえよう。